

### 第三部 異文化間コミュニケーションと通常性

## 第9章 伝達動詞の日独対照の試み

### —小説およびその翻訳を利用して—

#### 0. はじめに

日本語とドイツ語の伝達動詞 (*verba dicendi*) の使用状況の違いを明らかにするために、両言語の小説とその翻訳ならびに第三原語の小説の和訳と独訳を用いることにより、同一条件下で直接話法における伝達動詞の使用を比較した。その結果、日本語に比べてドイツ語のほうが伝達動詞の使用率が高く、しかも使用される動詞の意味や機能がより限定的であることが明らかになった。その差異は、両言語社会の引用行為に関する社会的・文化的背景の違いを反映していると解釈できる。本章では、その研究報告を行なう。

なお、本報告では、最近の当該分野の研究論文に比較的多く見られる記述方式にならって、文献指示や注釈を本文に取り込むようにしたことを付記しておく。

#### 1. 問題設定

従来、伝達動詞は、伝統文法の枠組みでは直接話法と間接話法の相互書き換えの問題として扱われてきた。しかし、オースティンの提唱した発話行為理論 (*speech act theory*) の登場によって、伝達動詞に関してはその遂行的意味 (*illocutionary force*) が注目されるようになり、研究の視野が広がられた。たとえば言語学の分野では、Uchida(1981) が発話とそれを導く伝達動詞の遂行的意味との関連を分析し、発話と伝達動詞の選択に関わる制約を明らかにしている。発話行為理論の文学研究への応用としては、ポティックハイマー(1990) と西嶋/ライネルト(1992) が挙げられる。前者は、グリム童話の登場人物に関して、その発言回数と発言を導く伝達動詞の種類を分析し、グリム童話に見られる性差別の構造を明らかにしている。後者では、発言を導く伝達動詞の使用は、著者による読者へ作品の読み方の指示あるいは

は暗示の機能を持つという仮説のもと、カフカ作品『城』と『アメリカ』において使用される伝達動詞の頻度と種類を調査し、作品理解の難しさとの関連を分析している。

一般に、小説などの語りの場面において発言を導く伝達動詞は、読者に発言者の発言に関する態度や意図あるいは発話の場面における遂行的意味などを明示し、読者の理解を助けるために使用される。このような伝達動詞は、クールタード(1999)では「非情動的動詞」「遂行動詞」「相互作用動詞」「動作身振り動詞」の4種に分類されている。本稿では、これにもう一つのカテゴリーとして「談話構成説明動詞」を加え、5つのタイプに分類することを提案する(クールタードの用語は部分的に修正してある)：

1) 一般的情報動詞 (nur allgemein informative Verben)：

発話の単なる言語的実現を表わす一般的な動詞 (例：「言う」, „sagen“ など)

2) 遂行動詞 (performative Verben)：発話行為を表わす動詞 (例：「命令する」, „befehlen“ など)

3) 相互行為構成動詞 (interaktionsorganisierende Verben)：

相手への指向性や対話としての形式を明示する動詞 (例：「尋ねる」, „fragen“ など)

4) 談話構成説明動詞 (diskursorganisationsbeschreibende Verben)：

発話のコンテキストにおける位置づけを表わす動詞 (例：「付け加える」, „hinzufügen“ など)

5) 意味不確定動詞 (inhaltlich nicht bestimmte Verben)：

発話に伴う動作や身振りなどを表わす動詞 (「微笑む」, „lächeln“ など)

このような伝達動詞の使用および選択は、引用者の判断にゆだねられている。すなわち、引用者は、さまざまな可能性の中から選択を行なう。したがって、小説などのテキストで使用される伝達動詞の種類や使用頻度に関する研究は、文体論研究の課題の一つとなりうる (vgl. Teuchert 1988, 西嶋/ラ

イネルト 1992)。

ところで、伝達動詞を用いて発言を引用する仕方には、同一言語内における個人的あるいは集団による違いだけでなく、言語文化による違いもありうる。たとえばドイツ語と日本語について発話の直接引用を比較すると、ドイツ語のほうが日本語よりも伝達動詞を多用し、しかも発話の意味や機能に関してより限定され、細分化された伝達動詞を使う傾向にあるという印象をうける。この点を明らかにするためには、個別言語の伝達動詞研究を2言語間の対照研究へと拡大する枠組みが必要になる。本章では、その枠組みを提案し、それに基づいて直接話法における伝達動詞の使用率および種類に関する違いを日本語とドイツ語に関して比較する。とりわけ、同一条件下で両言語の引用行為を比較することにより、引用行為における発話と伝達動詞との関係、著者による読者に対する情報提供の仕方（ストラテジー）、表現効果などに関する対照研究の可能性が開ける。本研究はそのための基礎作業と位置づけられる。

## 2. 研究方法

### 2.1. 調査の枠組み

同一条件下で比較を行なうのに必要となる共通性（Äquivalenz）を確保するために、本研究では、日本語とドイツ語の小説およびその翻訳を利用する。その理由は2つある。小説では、第一に伝達動詞を使用する直接話法が頻繁に出現するからであり、第二に翻訳を利用することにより同一場面における同一内容の発言の引用行為が比較可能となるからである。

日本語とドイツ語による同一場面での直接話法において、発言を導く伝達動詞の出現の有無に基づく組み合わせは、次のように論理的には4とおりある（例は文献欄に挙げてある使用テキストから引用した。引用文の前にある記号は資料番号を表わす。以下同様。なお、下線部が伝達動詞である）：

〔日本語〕 ———— 〔ドイツ語〕

a) 伝達動詞あり ———— 伝達動詞あり

比較する日独両言語において、ともに伝達動詞が出現する場合

例：kja-1) 「おい、溝口」

と、初対面の私に呼びかけた。

kda-1) »He, Mizoguchi! « rief er mich unhöflich an,  
obwohl er mich zum ersten Mal traf.

b) 伝達動詞あり——伝達動詞なし

日本語で伝達動詞が出現しているが、ドイツ語ではその対応表現が見あたらない場合

例：bjb-11) 「もう、教えてくださいでも、よろしいでしょう」  
しびれを切らして私が言った。「どうしてわかった  
のですか？」

bdb-11) »Nun sagt mir aber«, konnte ich schließlich  
nicht an mich halten, »wie habt Ihr es angestellt,  
das alles zu wissen? «

c) 伝達動詞なし——伝達動詞あり

b) の逆である。日本語では出現していない伝達動詞が、ドイツ語で出現する場合

例：kjc-16) 道詮師はさすがにお座なりの慰めなどと言わなかった。

「よろし。お引受けします」

kdc-16) Priester Dosen sprach keine üblichen Trost-  
worte von Amts wegen.

»Einverstanden. Will für ihn sorgen«, sagte er  
nur.

d) 伝達動詞なし——伝達動詞なし

発言だけが引用され、それを導く伝達動詞が日独両言語に出現しない場合

例：kjd-2) 私に向けられた彼の笑いには、権力者の媚びに似たものがあつた。

「何とか返事せんのか。啞か、貴様は」

kdd-2) In der Art, wie er mir zulachte, lag etwas wie

die Schmeichelei eines Mächtigen.

»Nun, keine Antwort? Bist wohl taub, du?«

上記4つのカテゴリーからなる枠組みに基づいて、日本語とドイツ語で書かれた小説およびその翻訳を利用して、直接話法で発言を導く伝達動詞の出現回数とその種類を調査し、両言語の伝達動詞の分布を比較する。

## 2.2. 翻訳を利用する際の問題点と使用テキスト

日本語小説とそのドイツ語訳あるいはその逆といった、片方の言語から他方の言語への翻訳では、起点言語の影響を受ける可能性がある。これは一般に「翻訳調」あるいは「翻訳体」といわれる文体と関連し、それ自体が研究対象として興味深い。しかし、同一条件下で発話を導く伝達動詞の出現のあり方を調査するという目的からすると、片方の言語からの影響を受けにくいテキストも対象にする必要がある。そこで本稿では公正を期すために、日本語とドイツ語以外の第三原語で書かれたテキストの日本語訳とドイツ語訳も合わせて調査する (vgl. メイナード 1993)。これによって、「翻訳調」という片方の言語による影響をも射程にいられた研究が可能になる。ところで、調査資料の範囲を小説とその翻訳に限っているため、たしかに個人的な要素(個人的文体や翻訳の仕方)が関係してくることは否めない。しかし、複数の資料によって日独両言語の伝達動詞の使用を比較することで、少なくとも傾向としての差異は指摘可能であると考ええる。

調査対象として取り上げる小説は、日本語とドイツ語のオリジナル作品2点ずつとその翻訳、それに第三原語で書かれた作品1点の和訳とドイツ語訳である。パイロット研究なので、網羅的にあるいはジャンル別に作品を選択していない。ただし、日本語とドイツ語のオリジナル作品1点ずつに関しては、ノーベル文学賞受賞作家(川端康成と Heinrich Böll)の作品を選んだ。また、日本語作品については、ドイツで比較的読まれている日本の作家によるものの中から、情緒的な文体で書かれていると思われる作品とそうでないものを意識的に選んだつもりである。使用テキストは次のとおり(出典などの詳細は文献欄を参照。なお、( )内の2文字のアルファベットは、資料

分類上の記号である）：

日本語作品とそのドイツ語訳：

川端康成：『雪国』（yj）とその翻訳 *Das Schneeland*. (yd)

三島由起夫：『金閣寺』（kj）とその翻訳 *Der Tempelbrand*. (kd)

ドイツ語作品とその和訳：

Franz Kafka: *Das Schloß*. (sd)とその翻訳『城』（sj）

Heinrich Böll: *Wo warst du, Adam?* (ad)とその翻訳『アダムよ、  
おまえはどこにいた』（aj）（略称：『アダム』）

第三原語の作品の日独訳：

ウンベルト・エーコ：『薔薇の名前』（bj）（略称：『薔薇』）

Umberto Eco: *Der Name der Rose*. (bd)

### 2.3. 調査対象としての伝達動詞

本研究では、原典とその翻訳について、それぞれのテキストの第一ページめから対応する100個分の直接語法を調査資料とした。傾向を調査するパイロット実験という性格からすれば、数量はこれで十分であろう。

また、本研究で調査対象とした伝達動詞は、発言（口頭で何かを言うこと）および発言のコンテキスト上の機能に関わる動詞に限定してある。すなわち、既述の5タイプの伝達動詞のうち、態度や表情・身振りといった非言語的コミュニケーションに関わる「意味不確定動詞」は、今回の調査では対象としていない。したがって、つぎのような発言導入表現は、態度の提示で発言を引用しているという理由で、今回の調査の射程には入らない：

意味不確定動詞

例：bja-83) 僧院長が微笑んだ。「誰にも許されませんし、誰にも  
なしえませんが。(略)」

bda-83) Der Abt lächelte fein : »Niemand darf es. Niemand  
kann es. (...)«

上例からもわかるように「意味不確定動詞」は、発言の言語行為としての性格や文脈上の機能を一義的に特定するものとは考えられないからである（発言に伴う動作や身振りなどの非言語的表現は、その意味が文化的に異なっている可能性があるので、それ自体が興味深い対照研究の対象となりうる）。

したがって、本研究で対象とするのは、発言そのものと発言のコンテクスト上の意味や機能に関わる4タイプの動詞、すなわち「一般的情報動詞」「遂行動詞」「相互行為構成動詞」「談話構成説明動詞」に限定する。それぞれの用例を挙げておこう：

・一般情報動詞

例：bja-3)「豊かな僧院だ」と、ややあって言った。「修道院長は(略)」

bda-3) »Reiche Abtei«, sagte er.»Dem Abt gefällt es, (...)«

・遂行動詞

例：bja-5) (略) 振り返って供の一人に命じた。「上へ引き返して、お客様が周壁の中へお入りになられるところだ、とご報告いたすのだ！」

bda-5) »Du«, befahl er einem aus seinem Gefolge, »lauf zurück und melde, daß unser Besuch sich der Einfriedung nähert ! «

・相互行為構成動詞

例：bja-7)「いつ、ご覧になられたのですか？」厨房係がたずねた。

bda-7) »Wann habt ihr es gesehen ? « fragte der Cellerar.

・談話構成説明動詞

例：bja-20)「とりわけ嬉しく思いました」と院長は続けた、「数多くの事件において、(略)」

bda-20) »Sehr gefreut hat es mich zu erfahren«, fügte Abbo hinzu, »daß Ihr in zahlreichen Fällen(...)«

なお、調査の重点は、直接話法における伝達動詞の使用頻度および種類に関する違いに置かれている。

### 3. 結果

作品名 伝達動詞の出現	『雪』	『金閣寺』	<i>Schloß</i>	<i>Adam</i>	『薔薇』
a) 日有ード有	4/100	61/100	68/100	83/100	59/100
b) 日有ード無	<u>0/100</u>	<u>0/100</u>	<u>0/100</u>	<u>0/100</u>	4/100
c) 日無ード有	9/100	12/100	29/100	1/100	<u>0/100</u>
d) 日無ード無	87/100	27/100	3/100	16/100	37/100

#### 3.1. 伝達動詞の出現状況

表の上欄は、作品名を表示し、左欄は、同一場面での引用行為における伝達動詞の有無を4つのカテゴリー（a, b, c, d）として表わしてある。たとえば、「a) 日有ード有」は、日本語テキストにもドイツ語テキストにも同じ場面で伝達動詞が使用されることを表わしている。数字は、直接話法による引用100個分について伝達動詞の出現数をそのカテゴリーごとに記述したものである。

伝達動詞の有無に関して、日本語小説とそのドイツ語訳およびその逆において、基本的にカテゴリー b) に属する例がない点に注目しておこう（下線部参照）。ただし、第三原語からの翻訳（『薔薇の名前』）では逆に、b) があって、c) の例が見つからない。この調査結果は、同じ意味の発言が引用される場合、日本語で伝達動詞が使われ、ドイツ語では使われないという場面は存在しないことを示している。

#### 3.2. 伝達動詞の使用率

『雪国』：日本語 4/100 (4%) vs. ドイツ語訳：13/100 (13%)  
 『金閣寺』：日本語 61/100 (61%) vs. ドイツ語訳：73/100 (73%)  
*Das Schloß*：ドイツ語97/100 (97%) vs. 日本語訳： 68/100 (68%)



*Wo warst du, Adam?* :

ドイツ語84/100 (84%) vs. 日本語訳: 83/100 (83%)

『薔薇の名前』/Der Name der Rose :

日本語訳63/100 (63%) vs. ドイツ語訳: 59/100 (59%)

上記の比較は、直接引用における伝達動詞の使用率を作品ごとに調べたものである。日本語テキストと比べると、ドイツ語テキストでは伝達動詞の使用率が10から30ポイント程度高い。一般的傾向として、日本語からドイツ語への翻訳では伝達動詞の使用率が増え、その逆では使用率が減少すると言える(下線部参照)。とくに、*Das Schloß* の和訳『城』において約3割の伝達動詞が日本語に訳出されていないのは、注目に値する。他方、*Wo warst du, Adam?* とその和訳『アダムよ、おまえはどこにいた』では、伝達動詞の使用率についてほとんど差がないという結果が出た。これは「翻訳文体」と関係がありそうだ。また、第三原語であるイタリア語からの和訳とドイツ語訳についても顕著な差は見られない。その理由については後で考察しよう。

### 3.3. 伝達動詞の種類

作品名 伝達動詞の種類	『雪国』 日→ド	『金閣寺』 日→ド	『城』 日←ド	『アダム』 日←ド	『薔薇』 日→ド
1) 一般的情報動詞	100.0 61.5	75.4 65.8	60.3 76.3	90.4 90.5	44.4 25.4
2) 遂行動詞	0.0 7.7	8.2 6.8	4.4 2.1	1.2 1.2	9.5 17.0
3) 相互行為構成動詞	0.0 7.7	16.4 26.0	32.4 19.5	7.2 7.1	31.8 40.6
4) 談話構成説明動詞	0.0 23.1	0.0 1.4	2.9 2.1	1.2 1.2	14.3 17.0

上表では、使用されている伝達動詞をその種類ごとに分けてみた。数字は、伝達動詞全体における占有率を表わし、上段が日本語に、下段がドイツ語に対応している。使われる伝達動詞の種類が作品ごとに異なることが見てとれる。この伝達動詞の種類による差異自体が、既述のように、文体研究の対象となりうる。

伝達動詞の分布をドイツ語と日本語で比べてみよう。まず『アダム』を縦に見ると、上段と下段の数字に変化がないのがわかる。それ以外の作品については、伝達動詞の種類によって大きく変化するものと、ほとんど変化しないものがある。ただし、『城』だけ他と傾向が異なる。この『アダム』と『城』以外の作品はすべて、ドイツ語では一般的情報動詞の使用率が低く、それ以外の種類の動詞の使用率が高いことがわかる。すなわち、日本語と比較すると、基本的にドイツ語のほうがより限定的な内容をもつ伝達動詞を用いる傾向にあるということだ。ただし、ドイツ語からの和訳（『アダム』と『城』）が全体的な傾向と一致しない点については、後で考察する。

#### 3.4. 伝達動詞の情報量の違い

伝達動詞が同一場面で日独両言語に共通して現われる場合（上記3.1.のカテゴリ－a)), 使用される伝達動詞の情報量の差は次のとおり：

『雪国』： 4例（日＝ド：4例，日＜ド：0例，日＞ド：0例）

『金閣寺』： 61例（日＝ド：52例，日＜ド：9例，日＞ド：0例）

*Das Schloß*：68例（日＝ド：60例，日＜ド：1例，日＞ド：7例）

*Wo warst du, Adam?*：

83例（日＝ド：82例，日＜ド：1例，日＞ド：0例）

『薔薇の名前』：59例（日＝ド：45例，日＜ド：14例，日＞ド：0例）

等号（日＝ド）は、対応する日本語とドイツ語の伝達動詞について種類の差がなく、他方、不等号（日＜ドと日＞ド）は、種類に差異があり、したがって意味や機能に関する情報に顕著な差がある場合を示す。日＜ドは、日本語の一般的情報動詞が、ドイツ語でそれ以外の情報量の多い動詞に対応して

いる場合である。日>ドはその反対を意味している。

『金閣寺』と『薔薇の名前』ではドイツ語のほうが、より限定された意味をもつ動詞を使う傾向にある。*Das Schloß* では逆に、日本語のほうがより限定的な動詞を使う例が比較的多く見られる（下線部参照）。『雪国』と *Wo warst du, Adam?* では、使用される伝達動詞の情報量について日独両言語で全くあるいはほとんど差が見られない。

では次に、一般的情報動詞以外の伝達動詞についてその種類ごとに作品を比較しよう。

### 3.5. 遂行動詞の使用率

〔日本語（訳）〕

〔ドイツ語（訳）〕

『雪国』：	0/4例 (0%)	vs. <i>Das Schneeland</i> :	1/13例 (7.7%)
『金閣寺』：	5/61例 (8.2%)	vs. <i>Der Tempelbrand</i> :	5/73例 (6.8%)
『城』：	3/68例 (4.4%)	vs. <i>Das Schloß</i> :	2/97例 (2.1%)
『アダム』：	1/83例 (1.2%)	vs. <i>Wo warst du, Adam?</i> :	1/84例 (1.2%)
『薔薇の名前』：	<u>6/63例 (9.5%)</u>	vs. <i>Der Name der Rose</i> :	<u>10/59例 (17.0%)</u>

全般的に遂行動詞の使用については、日本語とドイツ語で顕著な差は見られない。ただし、第三原語からの翻訳で多少の差異が認められる（下線部を参照）。これは、ドイツ語テキストで遂行動詞が多く使われていることを示している。

### 3.6. 相互行為構成動詞の使用率

〔日本語（訳）〕

〔ドイツ語（訳）〕

『雪国』：	0/4例 (0%)	vs. <i>Das Schneeland</i> :	<u>1/13例 (7.7%)</u>
『金閣寺』：	10/61例 (16.4%)	vs. <i>Der Tempelbrand</i> :	<u>19/73例 (26.0%)</u>
『城』：	<u>22/68例 (32.4%)</u>	vs. <i>Das Schloß</i> :	19/97例 (19.5%)
『アダム』：	6/83例 (7.2%)	vs. <i>Wo warst du, Adam?</i> :	6/84例 (7.1%)
『薔薇の名前』：	20/63例 (31.8%)	vs. <i>Der Name der Rose</i> :	<u>24/59例 (40.6%)</u>

下線部に注目すると、『金閣寺』と『薔薇の名前』では、ドイツ語のほうが相互行為としての側面（対応・対話的態度）を明言する相互行為構成動詞をより多く用いる傾向にあることがわかる。ただし、『城』はこれに反する傾向を示している。この点についても後述する。

### 3.7. 談話構成説明動詞の使用率

〔日本語（訳）〕	〔ドイツ語（訳）〕
『雪国』: 0/4例（0%）	vs. <i>Das Schneeland</i> : <u>3/13例(23.1%)</u>
『金閣寺』: 0/61例（0.0%）	vs. <i>Der Tempelbrand</i> : 1/73例(1.4%)
『城』: 2/68例（2.9%）	vs. <i>Das Schloß</i> : 2/97例(2.1%)
『アダム』: 1/83例（1.2%）	vs. <i>Wo warst du, Adam?</i> : 1/84例(1.2%)
『薔薇の名前』: 9/63例(14.3%)	vs. <i>Der Name der Rose</i> : <u>10/59例(17.0%)</u>

『雪国』と『薔薇の名前』について、ドイツ語では、発言の前後との関係、すなわち談話構成機能を明示する談話構成説明動詞を好んで用いる傾向にある（下線部を参照）。

## 4. 考察

今回の調査では、ドイツ語と日本語の伝達動詞の使用に関して、必ずしも明確な線が引けるような差異は明らかにできなかった。しかし、日本語に比べるとドイツ語のほうが、直接話法において伝達動詞をより頻繁に使い、しかもその種類については行為内容や場面機能をより具体的に明示する動詞を使用するという傾向は示された。日独両言語の伝達動詞の使用に関するこのような傾向的差異が、今回の調査資料だけでなく、一般的に認められるとするなら、次の問題は、その違いをいかに説明するかであろう。以下では、論点を伝達動詞の使用頻度という量の側面と種類という質の側面の2点に絞って考察してみよう。

### 4.1. 量の側面

日本語に比べてドイツ語のほうが伝達動詞をより頻繁に用いる理由は、少

なくとも文法レベルの待遇表現と文の語順という2つの点から説明できる。

まず、待遇表現だが、これは引用される発言自体のもつ表現形式に関わる。すなわち、日本語では引用される発言の中に構造的に含まれる社会言語学的情報（年齢差、権力の差、性差など）から登場人物に関して誰が誰に対してどのように発言しているのかについて、対人関係を含めた場面が明らかになることが多い。したがって、その状況を発言とは別に付加する形式で説明する、つまり伝達動詞を用いてメタコミュニケーション的にあえて言語化することは、冗長さを招きかねないので、日本語では避ける傾向にあると考えられる。ところが、ドイツ語などの多くのヨーロッパ言語では、性差や上下関係などの対人関係が発言自体に言語化されることは少ない。そこで、そのような場面情報を提示するために、伝達動詞を用いてその関係を明示するという読者のためのサービスが提供される（vgl. サイデンステッカー／那須 1987）。

次に第二の理由の語順について述べよう。日本語の語順は、動詞を含む発言が文末に来るため、動詞が現われる前の領域ですでに、誰が誰に対して発言を行なうのかに関する場面・情報が提供される。したがって、場面を提示した直後に発言の引用がくれば、当然のことながら発言がなされたことは明らかなので、あえて伝達動詞によって言語的な実現に関する情報を補う必要はない。たとえば、『雪国』には次のような例がある：

yjc-15) 和服に外套の駅長は寒い立話を切り上げたいらしく、もう後姿を見せながら、  
「それじゃまあ大事にいらっしゃい。」

すなわち、ある場面の説明の直後に発言を引用することで、たとえば「言った」という伝達動詞を使わなくてすむ。このように伝達動詞を使用しない引用方法は、場面の中に発言が埋め込まれているので、その発言が自然になされたという印象を与える。ところが、動詞が基本的に文末に現われない種類の言語では、このような引用の仕方は難しく、伝達動詞が形式上必要になり、その言語的な実現を表現せざるをえないようだ。上例に対応するドイツ語としては、次のように訳されている（下線部は伝達動詞を示す）：

ycd-15) Er drehte ihr bereits den Rücken zu, während er ihr noch  
zurief:

»Alles Gute für Sie! Auf Wiedersehen!«

#### 4.2. 質の側面

上述のように、たしかにドイツ語テキストで伝達動詞の使用率が比較的高いのは、引用される発言自体に含ませることができない社会言語学的なコンテキスト情報を提供するために、伝達動詞を使用するからだと説明できる。しかし、もう1つの問題、すなわち使用される伝達動詞の種類に関わる問題が残る。

使用される伝達動詞の種類を日独両言語で比較した結果、日本語のほうが発言の意味や機能を明確化・限定する動詞の使用率が低いことを上記の調査が示している。この点については、そもそも遂行動詞をはじめとして、日本語には相互行為をメタコミュニケーション的に命名するカテゴリーが少ないという事実と無関係ではなかろう。丸井／西嶋（1991）で指摘されているように、日本語には特定の遂行的意味と慣習的に結びついている表現が日常語のレベルで乏しい。もちろん、遂行動詞は多数存在しはするが、それは遂行的というよりむしろ説明的に使用されることが多い。これは、日常語レベルで自己の発言を場面の中でメタコミュニケーション的に行為として特徴づける機会、習慣あるいは必要性が歴史的に日本語社会で乏しかったことと関係している（遂行動詞の使用がドイツ語を含むヨーロッパ言語で特徴的であることは、Heeschen（1980）が指摘している。また、キリスト教文化という背景も関与している）。引用行為においても同様で、自己あるいは他者の発言をメタコミュニケーション的に言語行為として特徴づける習慣がほとんどない。このような背景のために、日本語では引用の際、発言のコンテキストにおける意味や機能を特定する伝達動詞をそれほど頻繁に使用しないと考えられる。

日本語では遂行動詞などを利用して、発言の行為的側面を明示しない傾向にあることは、新聞などの報道記事を見れば明らかであろう。そこでは、引

用に際して伝達動詞が明示されていないか、もし使われていたとしても、一般的情報動詞しか使用されていない。さらに、引用の特徴的な表現として「『…』として」という表現形式が新聞やニュース番組で好んで使用されているようである（例：「環境庁は『代替地の検討がどこまでされたのか、（中略）強い関心をもって対処していきたい』（野生生物課）としている」2000年2月16日付『朝日新聞』）。このような傾向は、どのように説明できるであろうか。1つの可能な説明として、新聞記事の性格に根拠を求めることができそうだ。すなわち、新聞などの記事では「客観的」な報道が目指されている。したがって、引用に際して、ある人物の発言の意味あるいは発言者の意図を記者が積極的に限定・明言せずに、引用符のつけられた発話自体に語らせようとする傾向にある。この傾向は、しかし、記者によって理解・解釈された（発言者の）意図を明らかにせず、その引用者の態度も提示しないことにつながる（vgl. 岡部 1988）。

## 5. 結語：2つの伝達方式と翻訳文の読みやすさ

本章では、日本語とドイツ語の小説およびその翻訳を利用して、直接話法における伝達動詞の使用率および種類に関して傾向としての違いがあることを明らかにし、その理由を探ってみた。すなわち、発言引用のスタイルとしてドイツ語では、誰が誰に対してどのような意図をもって発言したのかなどに関するコンテキスト情報を積極的に伝達動詞を用いてメタコミュニケーション的に言語化する傾向にあり、他方、日本語では、そのような情報を引用の中身、つまり引用される発言自体がもつ形式や内容に語らせるために、発言のコンテキストを言語化する伝達動詞を頻繁に使用しない傾向にある。

この考察から、発言の引用に際してどのような情報をどの程度発言に語りとして付け加えるかという伝達上の必要性に関わる傾向の違いを著者（引用者）による読者に対する伝達方式の違いと捉えることができる。すると、それぞれの言語に特徴的な2つの異なる伝達方式（伝達ストラテジー）を区別することができる。すなわち、分析的伝達方式と総合的伝達方式である。ドイツ語は発言の意味をメタコミュニケーション的に積極的に言語化する分析的伝達方式を、他方、日本語は発言の意味を発言自体から引き出させようと

いう総合的伝達方式を用いる傾向にあると言える。

この2つの伝達方式という視点を利用すると、ドイツ語小説の和訳2点が、日独両言語の伝達動詞の使用に関する全体的な傾向と異なるパターンをもって、いることを適切に説明できる。本章で分析対象となったドイツ語小説の和訳2点を比較すると、カフカの『城』のほうがベルの『アダムよ、おまえはどこにいた』より伝達動詞を訳出する割合が低い。前者では、ドイツ語伝達動詞の3割程度が訳されていないが、後者ではすべて訳出されている。さらに、日本語訳の『城』は、原文のドイツ語よりも発言の意味や機能を特定する種類の伝達動詞を多く用いている。そこで、この2つの和訳を読み比べてみると、『城』のほうが読みやすい。読みやすさの程度あるいは読者への情報提供というサービスに違いがあるのだ。その読みやすさ、すなわちこなれた和訳の程度差は、ドイツ語で使われている伝達動詞の訳出の仕方と関係がありそうだ。

和訳された『城』の伝達動詞の使用数がドイツ語原文に比べて顕著に少ないのは、日本語に特徴的な総合的伝達方式を用いて、なるべく伝達動詞を使わずに、引用される発言の表現を工夫することによって日本語らしく、すなわち一般的な日本語における伝達動詞の使用傾向に一致させ、自然な日本語文体に近づけているからだと説明できる。他方、一般的な傾向に反して、和訳のほうがドイツ語原文よりもコンテキスト情報を積極的に表現する伝達動詞を用いているのは、カフカ作品は一般に解釈しにくいと言われていることと関連している。すなわち、読者の理解を助けるために訳者は、ドイツ語に特徴的な分析的伝達方式に基づいて、発言のコンテキスト上の意味や機能を伝達動詞を利用して明示しようとしたと解釈できる。他方、『アダム』では、原文で使用される伝達動詞はほとんどすべて日本語に訳されている。これは、ドイツ語原文の伝達方式をそのまま日本語に移したことを意味し、「翻訳文体」を構成することになる。これが、その読みやすさを減じている1つの理由と考えられる。

今後の課題として、次の2点を挙げておこう。第一は、今回の調査で対象としなかった「意味不確定動詞」に関する日独対照研究である。これは、非言語コミュニケーションの日独対照研究への貢献が期待される。第二は、本



章で用いた対照研究の枠組みを利用して、さらにドイツ語以外の言語との比較研究を行なうことである。これによって、引用行為に関する文化的背景をも射程にのけた対照研究の可能性がひらけるだろう。

# 使用テキスト

- －川端康成：『雪国』。新潮文庫，1992（<sup>1</sup>1937）。
- －Yasunari Kawabata： *Das Schneeland*. München： Deutscher Taschenbuch Verlag, 1987.
- －三島由起夫：『金閣寺』。新潮文庫，1989（<sup>1</sup>1956）。
- －Yukio Mishima： *Der Tempelbrand*. München： Goldmann Verlag, 1988.
- －Franz Kafka： *Das Schloß*. In： M.Brod (Hrsg.)： *Franz Kafka Gesammelte Werke*. Taschenbuchausgabe in sieben Bänden, Frankfurt/M.： Fischer Taschenbuch Verlag, 1983.
- －フランク・カフカ：『城』（前田敬作訳）。新潮文庫，1971。
- －Heinrich Böll： *Wo warst du, Adam?*. In： B.Balzer (Hrsg.)： *Heinrich Boll Werke. Romane und Erzählungen I*. Köln： Gertraud Middelhaue Verlag und Verlag Kiepenheuer & Witsch, 出版年不詳。
- －ハインリヒ・ベル：『アダムよ、おまえはどこにいた』（小松太郎訳）。講談社文庫，1972。
- －ウンベルト・エーコ：『薔薇の名前』（河島英昭訳）。上・下，東京創元社，1990。
- －Umberto Eco： *Der Name der Rose*. München： Deutscher Taschenbuch Verlag, 1986.

# 参考文献

- －R. ボティックハイマー：『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』（鈴木晶ほか訳）。紀伊国屋書店，1990 (Ruth B.Bottigheimer： *Grimms' Bad Girls and Bold Boys. The Moral and Social Vision of the Tales*. New Haven： Yale University Press, 1987)。
- －M. クールタート：『談話分析を学ぶ人のために』（吉村・貫井・鎌田訳）。世界思想社，1999 (M.Coulthard： *An Introduction to Discourse Analysis*. 2<sup>nd</sup> Edition, London： Longman, 1985)。
- －V.Heeschen： „Theorie des sprachlichen Handelns“. In： Althaus, H.P. / Henne, H. / Wiegand, H.E. (Hrsg.)： *Lexikon der Germanistischen Linguistik (LGL)*. Tübingen： Niemeyer, 1980, 259-267.
- －丸井一郎／西嶋義憲：「A.Burkhardt の発話行為理論 ―終わりの始まり？―」。In： 『愛媛大学教養部紀要』第24号，1991，69-79。
- －泉子・K・メイナード：『会話分析』。くろしお出版，1993。

- 西嶋義憲／ルードルフ・ライネルト：「発話行為理論の文学研究への応用の試み — Kafka の作品を例にして—」. In : 『ドイツ文学論集』第25号, 1992, 83-90.
- 岡部朗一：『異文化を読む』. 南雲堂, 1988.
- E.G. サイデンステッカー／那須聖：『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』. 培風館, 1987 (1962).
- B. Teuchert : *Kommunikative Elemente und ihre literarische Vermittlung*. Frankfurt/M. : Peter Lang, 1988.
- S. Uchida : “Direct Quote and Speech Act”. In : Tomoshichi Konishi (ed.) : *Studies in grammar and language*. Tokyo : Kenkyusha, 1981, 246-256.